

---

# Teenage Walk

hiro2001

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Teenage Walk

### 【Nコード】

N2430C

### 【作者名】

hiro2001

### 【あらすじ】

1985年は、僕にとつての大きなターニング・ポイントになった。千雪との出会いこそが、その後の僕の人生を大きく変えた。あのレンタルレコード店での出会いから始まった。クリスマスイブの夜に見た弓張月だけが、すべてを知っている。今、渡辺美里の曲とともに蘇る、かけがえのない僕の物語……。

## プロローグ

五月のある晴れた水曜日、僕は会社の有給休暇を取って、中古のシビックと一緒に岬へと続く海岸通りを走っていた。サンルーフから見上げる空はほんのりと青く、僕はゴールデンウィークにもかかわらず仕事で休みが取れなかった自分を癒すように、ハンドルを握りながらゆっくりと深呼吸した。カーステレオのFMからは害のない音楽が次々に繰り出されていたが、そんな中で何十曲目かに流れた古いメロデーが僕の耳に止まった。

『鳥が空へ、遠く羽ばたくように、いつか飛び立てるさ、自分だけの翼で』

渡辺美里が放つフレーズが、遠い彼方で眠っていた僕の過去を少しずつ呼び覚ました。そう、十年前の今頃も、僕らは静かに繰り返し返される波の音とともにこの曲を聴いていたのだ。

「本当にこの歌のとおりよね。自分も愛せずに、本気で誰かを愛することなんてできないのよ」

まだ蒼かった春の日に放たれた彼女の一言が、長い歳月を経て、今鮮やかに胸に蘇ってきていた。

『粗雑に生きてたら、出会いも気づかない』

「ティーンエイジ・ウォーク」はなおも続いていた。もともと、僕は歌の教訓に反してこの十年の間、あまりにも粗雑に生きてしまっていた。数々の出会いにも気づかなかつた。いや、気づこうとせずにあえて目を背けてきたのだ。彼女を失ってしまったあの日から、僕の心の時計は止まったままだった。そして今、唐突に目の前に現れた音楽が僕を、彼女と初めて話した一九八五年の暑い夏の終わりへと誘った。

「今日も外は暑そうだな」

冷房の効いた店内から発せられた武史の声が、非現実的な響きとともに僕の耳に届いてきた。夏も盛りを過ぎたとはいえ、一日の中で最も気温の高い午後一時半過ぎにレンタルレコード店を訪れる奇特な客などいようはずもなく、僕ら二人はレコードの整理をする気力もなく、ただレジの前に佇んで窓越しに映る人々のうんざりした表情に対して無責任に同情していた。

「そして、俺の輝かしい高校生活最初の夏もバイトだけで終わってしまうのか」

「でも、お前はまだ高校生だからいいよ。俺なんか、去年の春に高校やめちゃってからずっとこんな感じだけ」

ため息交じりに呟いた僕に、武史は寝癖交じりの茶髪を手で掻きながら気だるく答えた。武史は僕よりひとつ年上で、本来なら高校二年生のはずだったが、本人曰く、俺が高校を必要としなかったとかで、入学して一ヶ月も経たないうちに自分からやめてしまい、それ以来ずっとこの店で好きな音楽を聴いていた。僕がバイトを始めたのがゴールデンウィークの真只中だったので、武史とは四ヶ月ほどの付き合いになるが、ビルボードのヒットチャートに並ぶ音楽をこよなく愛するという一点で僕らは見事に一致し、今ではお客さんへの応対もそこそこに、二人で競って流行の曲を店内に響かせていた。もつとも、一日の来客数は本当に微々たるものだったが。

「よしっ、今日はブライアン・アダムスでいこう」

「おいおい、また『ヘブン』か？」

「まさか。今日はこれだよ」

そう言っつて不敵な笑顔を浮かべた武史がかけた曲は、「サマー・オブ・シックスティナイン」だった。

「思い出のサマーか」

「バイトだけで終わってしまった俺たちの、切なくも儂い夏の思い出ってとこかな」

武史の不似合いな感慨も、すぐに曲の中に吸い込まれていった。僕らはそうして、去り行く夏の想いをブライアン・アダムスと共有した。でも、あまりにその世界に深酔してしまったせいで、店内に客が入ってきたことも、やがて目の前にレコードが差し出されたことにも気がつかなかった。

その女の子は、口を真一文字に結んだまま身じろぎひとつしなかった。ぴったりした白いＴシャツに黒いパンツ姿で、やや眉間に皺を寄せながら僕の胸のあたりをじっと眺めていた。肩に触れない程度に短めにカットされた黒い髪が、大きめの黒い瞳と見事にマッチしていた。ブライアン・アダムスのLPを間に挟んで、僕らは奇妙な時間の流れの中に佇んでいた。

「君もビルボードを追いかけてるの？」

それは本当に不用意な一言だった。「思い出のサマー」がもたらしたもののなかもしれない。でも僕は、純粹な気持ちで彼女に訊いてみたかったのだ。何故なら、僕にとって彼女との出会いはこれが初めてではなかったからだ。

それは、五月半ばの薄曇りの日だった。バイトを始めて十日が過ぎ、どうにか自分の日常生活に馴染んだ頃でもあった。いつものように学校帰りの午後五時からシフトに入っていた僕は、既に意気投合していた武史とともに、いつ来るかもわからない客をぼんやりと待っていた。

その子が店に入ってきたのは、五時半を少し過ぎた頃だった。彼女はひとしきり店内を見回すと、洋楽の新譜が集まるコーナーに足を運び、数分をかけて滑るようにレコードを操ると、お目当てのLPを抱えて僕の目の前に差し出した。表面に「ブレクファスト・クラブ」の文字を見た僕は、斜め後ろの壁に掲げられていたビルボードのチャートをちらっと眺め、それから店内にかかっていた曲がそ

のアルバムと一致する瞬間を感じていた。「ドント・ユー」……シンプル・マインズの歌うその曲はまさしくチャートのナンバーワンであり、僕はその偶然を偶然とは思えずに彼女の黒い瞳をじっと見つめてしまった。制服姿の彼女は、僕の胸のあたりをじっと見ていて、こちらの視線に気がついていたのかどうかはわからなかった。僕はすぐに我に返ると、ややぎこちなく会計を済ませ、そのまま黙って去り行く後ろ姿を見送った。

「あの子、久しぶりに来たな」

「えっ、常連さんなのか？」

「ああ。一時期は毎日のように来てたな。よく流行ものの洋楽を借りていってさ。でも、ここしばらくは来てなかったな」

僕の質問にも、武史は気のない言葉を返すだけだった。そこには彼女に対する興味が微塵もないことが伺えた。確かに彼女は、僕から見ても取り立てて美人でも可愛くもなかった。でも何かがひっかかっていた。彼女には、僕の心の中にダイレクトに響く何かがあったのだ。

僕は、それから彼女の姿を目で追い続けた。その制服から、後にやや遠い場所にある私立高校の生徒であることはわかったが、彼女がカウンターに持ってくるアルバムはどれもビルボードチャートの上位にあるものばかりで、さらに多くの場合において店内に流れていた、というより僕が流していた曲に一致していた。僕はこの数ヶ月の間に、彼女がチャートを追いかけていることを直感し、いつの日かその事実を確かめようと考えていた。だからその、八月三十一日の昼下がりに不躰な言葉を投げかけてしまったとしても、少なくとも僕にとっては必然的な出来事だったのだ。

「……だとしたら？」

でも、彼女のその反応は全く予期していなかった。僕は次の言葉に詰まってしまい、恥ずかしさのあまりに慌しくレジを打つことしかできなかった。

「へえ、お前、ああいうのがタイプだったんだ」

「何言ってるんだよ、違うよ。ただ何となく気になってさ」

彼女が去って行った後で悪戯っぽい笑みを浮かべながら訊いてきた武史を何とか交わした僕は、自分でも何となく居心地が悪くなつて、かかっていた曲をブライアン・アダムスからコリー・ハートに変えた。「ネバー・サレンダー」の切ないロツカバラードを聴いているうちに、夏休み最後の日に起きたささやかな出来事が胸に染み入ってきた。そう、その時僕の前にも、窓の外に流れる人々の目の前にも、秋という名の物憂げな季節がどうしようもなく迫ってきていたのだ。

「一体どうしたの？ 今日の尚希、ちょっと変よ」  
「そうかな？」

怪訝な表情を浮かべながらこちらを覗き込む未央に対して、僕は曖昧な言葉を返すことしかできなかった。午後六時を過ぎた店内には、彼女がかけた「セント・エルモス・ファイア」が訴えかけるように流れていた。それはチャートのトップ目前までランクアップしていて、同じく映画の主題歌だった、ヒューイ・ルイス・アンド・ザ・ニューズの「ザ・パワー・オブ・ラブ」を今にも追い落としそうな勢いだった。もっとも僕は、そんなジョン・パールの勢いとは正反対に、未央に対してなかなか自分の気持ちを伝えられずにいた。二期期の始まりを口実に意を決して未央と向かい合ってはみたものの、いざとなると口の中がからからに乾いてしまい、まともな会話をさえままならないほどに緊張していた。

「この曲、やっぱりいいわね。きつと映画も最高なんだろうな」

「じゃあ、今度一緒に見に行こうか」

「何言ってるのよ。まだアメリカで公開されたばかりじゃない。日本で見られるのはせいぜい半年後よ」

「そう、だよな」

「やっぱり今日は何か変よ」

それで僕との会話を諦めたのか、未央は新譜のレコードを棚に陳列すべく、カウンターを、そして僕の傍を離れていった。彼女は僕よりもひとつ年下で、本来は中学三年生なのだが、いじめに遭ったことがきっかけとなって学校に行かなくなり、その代わりにこの店でバイトをしていた。茶色がかつた髪はポニーテールにまとめ上げられ、小ぶりの顔には均整の取れた目鼻が並んでいた。背丈が小さかったことも相まって、彼女はどう見ても可愛い部類に入る女の子だった。そしてかく言う僕も、彼女のことをがたまらなく好きな男の



中の一人だった。

「なあ未央」

でも、僕の声は音楽に掻き消されて聞こえないようだった。僕はレコードの針を一旦上げると、今度こそは聞こえるような大声で叫んだ。

「未央！」

「えっ、何？」

「来年になってもいいから、セント・エルモの火を見に行こうな」  
きよとんとした目でこちらを見る未央にそう告げた僕は、改めて最初から曲をかけ直してみた。アップテンポに歌い上げるジョン・パーが、僕に切ない想いを植え付けていた。焦らなくてもいい、と思った。でも必ず言おう、きつと伝えようと、その時僕は自分の胸に固く誓っていた。

彼女がやって来たのは翌日の午後五時過ぎだった。その日は一時間ほど前から突然の雨が降り出し、傘を持たなかった僕は駅から全速力で走って店内に駆け込んだ。おかげでバイトの開始時刻には余裕で間に合ったが、体全体が濡れ鼠のようになり、制服がまわりつく嫌悪感を存分に味わうことになった。

「おっ、水も滴るいい男ってやつだな」

既に来ていた武史に奥のロッカーで冷やかされた僕は、とにかく裸になると、見かねた店長が貸してくれたグレーのスウェットを下に着込んでカウンターの前に立った。

「なかなかよく似合ってるぜ」

そうして、武史が放った一言に僕が言い返そうとした時、彼女はまさに現れた。一昨日借りていったブライアン・アダムスをこちらに向かつて無言で差し出すと、いつもと同じように洋楽の新譜コーナーに行き、五分ほどでダイア・ストレイツのLPを抱えて舞い戻ってきた。それは、現在ヒットチャート急上昇中の「マナー・フォール・ナッシング」が入っているアルバムで、何を隠そう店内にか

かっている曲そのものだった。

「一昨日は急に声をかけたりしてすみませんでした。つい口が滑っちゃって」

そんな僕の謝罪にも、制服姿の彼女は何の反応も示さなかった。相変わらず眉間に皺を寄せながら、僕の胸元をじっと見ているだけだった。何もかもを諦めた僕はそのまま素早く会計を済ませると、早口のありがとうございましたとともに彼女の後ろ姿を見送るしかなかった。

「お前相当嫌われたな」

「別にいいよ、嫌われたって」

「とか何とか言って、本当は結構シヨックなんじゃないか？」

武史の指摘は見事に的を射ていた。彼女を好きなわけではなかったが、自分と同じ嗜好を持っていそうな彼女からの冷たい態度は僕の胸を鈍く抉った。そう、僕は単純に彼女と友達になりたかったのだ。ヒットチャートに並ぶ音楽を共有し、彼女が通う学校や一緒に暮らす家族のことを訊きたかったのだ。二人の間には、同じ価値観を共有できる要素があるような気がしていた。だから哀しかった。彼女から嫌われたかもしれないその事実が。

でも、翌日になって事態は急変した。率直に言えば、僕は彼女から手紙を受け取った。いや、手紙というにはあまりに文章が短かったのでメッセージといったほうが適切だったが、いずれにしても僕は彼女と初めてコミュニケーションを取ることができたのだ。

それは、彼女が借りるためにカウンターに差し出したアルバムの下に隠されていた。隣に未央がいたこともあって、僕はその白い紙のかけらを素早くズボンのポケットにしまつと、何事もなかったかのように会計を済ませた。

「あの女の子、なかなかいい目をしてるわ。クール・アンド・ザ・ギヤングを聴くなんてね」

未央の言葉もうわの空だった。僕は用を足すふりをして店の奥にあるトイレに入ると、ポケットに入れたばかりの紙片を早速取り出した。

今晚九時半に、駅前の喫茶店で待っています

僕はそこに書かれた文章をじつと眺めた。取り立てて特徴のない扁平な文字が並んでいたが、一方でそこには強い意思力が秘められていた。必ず行かなければいけないような使命感を抱かせる何かがあった。もっとも僕には、そんな強制力など必要なかった。誰かから強いられるまでもなく、僕は自らの意思で彼女と会うことを望んでいたからだ。

午後九時を過ぎて店のシャッターを下ろすと、僕は片付けやレジの清算もそこそこに未央に別れを告げ、既に雨の上がった駅前通りを彼女の待つであろう喫茶店に向かって走った。二日続きの雨にもめげず、どうにか体にまとわりつかない程度に乾いた制服が、今度は汗で湿っていくのを気にしながら店に着くと、すぐに目に止まるように入口の傍にある席に身を埋めた。レトロな雰囲気醸し出す店内には他に客の姿もなく、腕時計で約束の時間の五分前であるこ

とを確認すると、はやる気持ちに懸命に抑えながらアイスコーヒ―を注文し、彼女が目の前に現れるのをひたすら待ち続けた。

でも、十時を過ぎるところか閉店時間の十一時になっても彼女は姿を見せなかった。店内にはほのかにポール・ヤングの「エブリタイム・ユー・ゴー・アウェイ」が流れ、僕はその歌のようなやるせなさに胸が打ち震えた。彼女にとっては些細な約束だったかもしれないが、少なくとも僕にとっては重大なことであり、その純粹無垢な裏切り行為にやり場のない憤りを覚えた。僕は寂しかった。今になってようやく、彼女に踊らされていた哀れなピエロに過ぎなかったことに気づいたのだから。

「そうか、そりゃあとんだ災難だったな」

「よく考えてみれば、そんな誘いに簡単にのつた俺が悪いんだけどな」

それは翌日の午後八時過ぎだった。あまりに元気がない姿を見かねたのか、武史がその訳を尋ねてきたので、僕は夕べの出来事を最初から話すことになったのだ。店内にはクール・アンド・ザ・ギャングの「チェリッシュ」が静かに流れ、窓の外の暗闇には通りを行き交う車のライトが浮かんで消えていった。

「まあ、嫌なことは早く忘れちゃってさ。そうそう、今度未央も入れて三人でどこかに行こうぜ」

武史のそんな励ましは身に染みたが、昨日の今日で簡単に気持ちの切り替えがつかはずもなく、一刻も早く家に帰りたくなった僕は閉店後の片付けを武史に任せると、いつものように裏口から細い路地を通って表通りへと出た。

もっとも僕は、そのまま家に帰ることをしなかった。

僕の目の前にあつたもの、それは店のシャッターに寄りかかったままうつむく制服姿の彼女だった。

「俺のことを待っていてくれたんですか？」

勇気を振り絞った問いかけに対して、彼女は黙ったまま首を少し

だけ縦に振った。

「ここじゃ何だから、どこか店にでも入りませんか？」

「河原」

「えっ？」

「夜風が気持ちいいから」

彼女はそれだけを残して僕を誘う様子もなく通りを歩き始めた。

僕はその横を歩くことに躊躇いを感じ、一步下がった斜め後ろから彼女を見守った。夜の九時半を過ぎたとはいえ、むせぶような暑さは未だ健在で、僕は摩訶不思議な状況に戸惑いを覚えながらも、河原までの十五分の道のりを奇妙な期待感を抱きながら過ごした。

その場所からは斜め前を横切る大きめの橋と、川向こうに広がる住宅地の明かりが見渡せた。お世辞にも抜群のロケーションとは言えなかったが、彼女の言うとおり時々頬を掠める夜風が心地よかった。僕らはその間に微妙な距離があつたものの並んで腰を下ろし、暗闇に沈んだ川の流れを見ることもなく眺めていた。

「よくここに来るんですか？」

僕の質問に、彼女は言葉の代わりに軽く頷いて見せた。でもそれ以上の会話は続かなかった。いや正確に言うと、彼女が会話を好まないことは感覚的にわかっていたので、必要以上に話をしないほうがいいのではないかという判断からあえて続けなかったのだ。もともと、黙ったまま十分が経過するにつれて、せめて名前だけでも訊かなければと少し焦ったことは事実だったが。

「名前、何ていうの？」

その一言は、彼女のほうから放たれたという点でまさに画期的だった。僕は地上に吹き上げるマグマのような昂揚感を懸命に抑えながらも、努めてクールな音程で模範的に答えた。

「尚希、塚本尚希っていいいます。十六歳、高校一年生です」

「いつからあそこでバイトしてるの？」

「今年の五月からです」

「ぶっん」

僕は、それに続いて彼女自身の名前が告げられることを期待したが、予想に反して彼女は再び黙り込んだので、仕方なくこちらからその流れを作り出した。

「あなたの名前は？」

「崎谷千雪、十八歳。高校二年生」

「えっ、十八歳だと高校三年生じゃないんですか？」

その質問に千雪は答えようとはしなかった。まだ時期が早いとも言うような表情で僕を見た後、視線を外して正面を流れる川に向けた。再びの長い沈黙かと思われたが、千雪はすぐにこちらを向いて僕に話しかけてきた。

「また、こうして話ができるといいんだけど」

「もちろん、いつでもいいですよ」

僕の答えに、千雪はこちらを向いてかすかな笑みを浮かべた。それは本当に一瞬の出来事だったが、僕にとっては雪解けを象徴する雪割草のような笑顔だった。今日のやり取りが会話かどうかはわからなかったが、少なくとも千雪との間に心の交流があったことは事実で、その意味で僕は着実に第一歩を踏み出していた。明らかに心地よさを増した夜風が再び僕らの頬を撫で、川を渡って住宅街の彼方に消えていった。

九月半ばの原宿は三連休の真只中というだけあって人も多く、僕ら三人は今にも雨が降り出してきそうなどす黒い雲に覆われた竹下通りを、周囲と何度も肩をぶつけ合いながら東へ向かって歩いていった。武史は以前に店で話していたことを覚えていて、未央の希望を最大限に聞き入れながら、三人でこの都心にある雑然とした街に繰り出してきたのだ。

「それにしても、やっぱり人が多いな」

「当たり前じゃない、原宿なんだから。あつ、あの店テレビで見たことある。ねえ、行ってみようよ」

僕の見たとおりの感想を無視するかのように、未央は一人先陣を切って早足で歩き出した。必然的に僕と武史はその後を金魚の糞のようについていくだけとなり、ひとしきり時が流れた頃には彼女の背中を目印に歩くだけで精一杯になっていた。

「なあ、雨も降ってきそうだからどこかで休もうぜ」

そうして、僕の気持ちを代弁するように武史が放った言葉を、未央がようやく受け入れて近くにあった喫茶店に入った頃には、我慢しきれなくなつた雲から大きな雨粒がアスファルトの路面を濡らし始めていた。

「とうとう降り出したな」

「残念だわ。もっと見たい所がたくさんあつたのに」

窓際の席から悔しそうな表情で外を眺める未央を見ながら、僕は武史と目を合わせて心の中で雨を降らせてくれた神様に感謝していた。

「あつ、俺トイレに行つてくるわ」

店員が注文を訊きに来る前にそそくさと席を立つた武史に、僕は少しの不自然さも抱かなかったが、そうして二人きりになった空間には、テーブルの上の氷水だけが所在なさに佇んでいた。

「それ、とてもよく似合ってるよ」

「えっ、そう?」

何を話したらいいのか急にわからなくなった僕は、とっさに未央の着ていた服を褒めることでその場を繕った。未央は薄いピンクのTシャツにデニムのショートパンツのラフなスタイルで、秋の始まりを告げる原宿の街に見事に溶け込んでいた。僕は改めて未央に対する自分の気持ちと向き合うことになり、その後の沈黙が重なっていく中で想いは加速度的に強まっていった。もう抑えることはできなかった。それは本当に自然な流れとなって僕を突き動かした。

「武史つたら、いつまでトイレに行ってるのかしら?」

「なあ、話したいことがあるんだ」

「えっ、何?」

心臓がはちきれそうだった。体中の血液が顔に集まり、未央の顔以外には目の前にあったに違いないアイスコーヒーさえ見えなかった。

「俺、未央のことが好きだよ」

その後起きたであろう未央の表情の変化を、僕は怖くて見るこ  
とができなかった。時の流れはそこで凍りつき、周囲の光景どころ  
か自分の心臓の鼓動さえ止まってしまったかのように思えた。激し  
さを増しているであろう雨音も耳には届いてこなかった。

「ごめんなさい」

ばつが悪そうに頭を下げる未央の姿を、やはり僕はまともに見る  
ことができなかった。予期していたこととはいえ、一パーセントの  
確率さえ否定されてしまった現実には、僕を奈落の底へ突き落とすの  
に十分なものだった。

「付き合っている人がいるの。尚希の気持ちは嬉しいけど、本当に  
ごめんなさい」

「いや、いいんだ。あつ、武史が戻ってきたぜ」

未央の口からさらに放たれた新事実に対するショックで言葉を失  
った僕にとって、ようやく視野に入ってきた武史の姿はせめてもの



救いだつた。自分で作り出してしまったとはいえ、止まっていた時間が再び流れ出したことを確認した僕は、この数分間を切り捨てるかのように無理なハイテンションで武史に話しかけた。

「おい、トイレに一体何分かつてるんだよ」

「いやあ、悪かったな。トイレの前にも行列ができてさ、本当に参ったぜ」

武史はわざとらしい言い訳をすると、既に目の前に運ばれてきていたコーラを半分まで一気に飲み、それから一息ついたかのように椅子の背もたれに寄りかかった。

「これからどうしようか？ このまま雨が降り続くようだったら帰るしかないかな」

「えっ、もう帰るの？」

「仕方ないだろ。また来ればいいじゃないか」

残念がる未央と一緒に説得してもらおうと、隣の武史に顔を向けたところでその異変に気がついた。武史はついさっきまでのくつろいだ表情とは一変して、うつむき加減で何かを真剣に考えているようだった。

「どうしたんだ、武史？」

「いや、もしこれで帰るんだったら、尚希に話しておきたいと思つてさ」

「何だよ、改まって」

「実は俺と未央、付き合ってるんだ」

武史の発言はあまりに突飛だった。そこには、身構える前に技をかけられたような唐突さがあつた。明らかな反則行為だった。だから僕は、それに対する言葉を用意していなかった。模範的な回答を出すまでに数十秒の時間を要した。

「……そうか。何だよ、水臭いな。そうならそうと早く言えばいいのに」

「付き合い始めてからまだ何日も経ってないからさ」

武史の言い訳を横で聞きながら、同時に僕は正面で顔を赤くする

未央を見ていた。恥ずかしいのは僕のほうだった。知らなかったこととはいえ、僕はそんな未央に不覚にも自分の想いを伝えてしまったのだ。誰かに助けてほしかった。窓の外に降りしきる雨粒にさえ救いを求めたかった。でも僕にはわかっていた。誰も手を差し伸べてはくれないことを。自分の気持ちは自分自身で決着をつけるしかないことを。

千雪が店にやって来たのは連休明けの夜、閉店間際の午後九時前だった。制服姿の彼女はいつもより明らかに遅かったものの、相変わらずの無愛想な表情で僕の前にアーハのアルバムを差し出した。それはビルボードチャートを着実に上昇している注目株で、言うまでもなくそこには店に今かかっている「テイク・オン・ミー」が収められていた。

「外で待つてるから」

会計の最中に千雪から放たれた言葉に驚いたのは、僕よりもむしろ武史のほうだった。武史は僕と千雪を交互に見比べた後、なるほどそうかと得心したように深く頷いた。

「わかった」

それだけを言って素早くレジを打ち、アーハとともに去って行く千雪の後ろ姿を見守っていた僕の隣から、でもそれを呼び止める武史の声が響いた。

「中で待つてなよ」

振り返った千雪よりも僕のほうが驚いていた。

「もうすぐ終わるからさ、レコードでも見ながら待つてなよ」

武史はもう一度具体的な内容とともに千雪に声をかけると、恩着せがましく僕に向かって耳打ちした。

「片付けは俺がやつとくから、お前はもう上がっていいぜ」

それでも僕は躊躇したが、既に閉店時間になっていたこともあってそのまま武史の言葉に甘えることにした。僕は千雪に軽く目配せした後、奥のロッカーで素早く着替えを済ませ、武史に感謝の言葉を投げかけながら、レコードではなくぼんやりと窓の外を眺めていた彼女を誘って店の外に出た。

夏のかけらが残っていたこともあって昼間は暑かったが、この時間にもなると秋特有の乾いた夜風に体全体が包み込まれて過ごしや

すかった。僕らはこの間と同じように、お互いに黙ったまま通りを河原に向かって歩いていった。ただひとつ違うのは、僕が千雪の斜め前を歩いているという現実だった。

「ずいぶん涼しくなったね」

「もう秋だからな」

僕らは河原に並んで座り、川を渡る澄んだ風の音と鈴虫の鳴き声が奏でる音楽に耳を澄ませていた。僕は、いつの間にか千雪に対する言葉遣いが変わっていることに気づきながらも、その自然な雰囲気二人の距離が明らかに縮まっていることを実感した。お互いの座る位置取りにもそれが如実に現れていた。

「何かあったの？」

「どうして？」

「何となく、そんな風に見えたから」

千雪は僕を見ていなかった。正面に広がる住宅街の明かりか、あるいはその向こうに広がる星の世界を見ているようだった。

「フラれたんだ、女の子に」

「そう」

「他の男と付き合ってたんだ」

沈黙が流れた。千雪の短い黒髪が風に揺れていた。鈴虫の声が少し大きくなったような気がした。

「でも好きなんでしょ？」

「えっ？」

「その子のことが好きなんでしょ？」

その時、ようやく千雪がこちらを見た。黒い瞳に吸い込まれそうな気がした。僕はとっさに返す言葉を失った。

「可能性、あるんじゃない？」

「……そうかな？」

「尚くんが好きな間はね」

僕のことを尚くんと初めて言った千雪の顔には、はっきりとした笑みが浮かんでいた。誰が見ても明らかかな笑顔だった。それは奇妙

な、でも神秘的な瞬間だった。千雪に包まれているような優しい感覚だった。だから僕は、その安寧な状態に酔いしれたくて、黙ったままいつまでも川を眺めていた。

翌日は朝から雨が降り続いていた。僕は原宿以来、初めて未央と二人でバイトのシフトに入っていて、窓の外を行き交う傘の群れをぼんやりと眺めていた。午後七時を過ぎた店内に相変わらず客の姿はなかった。

「雨が降ると何か憂鬱よね」

「そうだな」

それは二時間が経って二人が初めて交わした会話だった。カウンターの前で並ぶ僕らの間には透明な壁が横たわっていて、お互いの心のやり取りを明らかに阻害していた。僕らは再び黙り込み、居たたまれなくなつた僕は未央から離れると、整理する必要のない陳列棚をむやみにいじつた。店内には、ホイットニー・ヒューストンのアルバムからのセカンドシングルで、チャート急上昇中の「セイビング・オール・マイ・ラブ・フォー・ユー」がかかり、僕はその切ない歌声と自分の気持ちを重ねながら無意味な作業を続けた。

「ねえ、ジュースでも飲まない？」

歌が終わつたところで未央に声をかけられた僕は、それを拒む理由もなくゆっくりと頷いた。未央は、店を出てすぐ横にある自動販売機でコーヒーとグレープフルーツジュースを買つとカウンターの前に置き、手招きをしながら僕を呼び寄せた。

「私ね、雨が降るといつも思い出すの」

再びカウンターの前で並んだ未央が、淡いピンクのハンカチで服についた雨粒を落としながら話し始めた。でも、ポニーテールの髪の上にまだ何粒かの水滴が残されているのを僕は見逃さなかった。

「何を？」

「同級生が死んだ夜の雨」

未央は缶ジュースのプルタブを開けると、でもそれには口をつけずに押し黙つた。僕はただ話の続きを待つしかなかった。

「中学二年生になったばかりの頃、クラスに無口で大人しい男の子がいたの。教室の最前列に座っていて、休み時間もいつも一人だった。でもね、別に勉強しているわけじゃないの。ただじっと座ってるの。偶然隣に座ってたせいもあって余計に気味が悪かったわ」

未央はようやくジュースを一口飲んで、さらに話を進めた。

「最初は興味本位だったの。どんな反応をするだろうなって。机の上に落書きしたり、教科書やノートを隠したり……。その子何も言わなかった。ただ黙ってるの。だから私、逆に怖くなってやめたんだけど、そのうちにクラスのみんなが悪乗りして、どんどんエスカレートしていったの。最後のほうは、口では言えないくらいにひどかった」

そこまで来て、僕もようやくコーヒを飲むことができた。でもそこで一息ついているわけにはいかなかった。

「夏休みが終わっても、その子は学校に出てこなかったの。でも私は、まだはつきりと感じていなかった。確かに始めたのは私だったけど、みんなのほうがいけないんだって思ってたの。半月後にその子が飛び降りるまでは」

僕の言葉は失われていた。既に音楽のない店内は見事なまでに静まり返っていた。

「家に連絡があった夜も、今日と同じに雨が降ってた。時期的にも今頃よね。後悔なんて生易しいものじゃなかった。体中が切り刻まれた感覚だった。雨に打たれて死んでしまいたいと思った」

未央の口から放たれた、「死」という言葉だけが一人歩きしていた。他人の死、そして自分の死……。その響きは僕が今まで感じたことのない重さに満ちていた。

「それから私へのいじめが始まったの。クラスのみんなから私が悪いって言われて。仕方ないよね。原因は全部私にあるんだから」

それが話の終わりだった。未央の最後の言葉が空中に吸い込まれた後、店内は再び完全な静寂に包まれた。

「ごめんなさい、何か暗い話になっちゃって。でもまだ一年しか経

つてないから」

未央の目からとめどなく溢れ出た涙が頬を伝い、次々と床にこぼれ落ちた。僕はとっさに彼女の肩を抱きかかえると、小刻みに震える背中をゆっくりと撫でながら、やがてその体全体を優しく抱き締めめた。

「未央だけが悪いんじゃないよ」

それだけしか言えなかった。でもそれが全てだった。未央の涙と吐息で、僕の胸のあたりはしっとりと濡れた。彼女は声を出さなかった。ただ自分を責めるように音もなく泣き続けるだけだった。



「『テイク・オン・ミー』 ついに一位になったね」

それは十月も半ばを過ぎた、涼しいというよりはむしろ寒い日だった。秋は街角の至る所にその影を落とし、いつものように静まり返った店内にも密かに忍び込んでいるような気がした。午後八時を過ぎ、「マイアミ・バイスのテーマ」を聴きながら武史と下らない話をしている時に千雪は現れた。そして彼女は、新譜のコーナーには向かわずにカウンターの前に立って嬉しそうに言ったのだ。僕らは以前から非公式にアーハを応援していて、「テイク・オン・ミー」がビルボードチャートをランクアップするたびに、その喜びを自分たちのことのように共有した。最初の頃はぎこちなかった二人の関係もそれに比例して親密さを増し、千雪の顔には以前とは比較にならないほどの感情の起伏が現れるようになっていた。

「ああ、ちよつとやきもきしたけどな」

「お二人さん、相変わらず仲がいいな。本当に羨ましいぜ」

最近では決まり文句になっていた、武史の温かい冷やかしのとおり、僕らは自他ともに認めるほど仲良くなっていたが、少なくとも僕にとつて、千雪の存在は価値観の合う友達の範囲を逸脱していなかった。叶わないことながら、僕は未だに未央に想いが残っていたし、それと千雪に対するものとは、気持ちの次元が明らかに違っていたからだ。その意味で僕は、女としての千雪を見ていなかったのかもしれなかった。

程なく、相変わらずの恩着せがましい武史の計らいで店を上がった僕は、ひと足早く駅前のレストランで待つ千雪のもとへ向かった。千雪とは週に一、二度会っていたが、秋の深まりとともに寒さを増した河原とは既に別れを告げていた。店の入口から中を覗くと、すぐ傍の席に彼女は座っていた。テーブルには飲み残しのコーヒーカーツプが横たわり、千雪は正面に座った僕のために店員を呼んでコーヒ

―を頼んでくれた。

「ねえ、『テイク・オン・ミー』って、一体どういう内容の曲だと思う？」

いきなりの千雪の質問は、僕の解答能力をかなり超えたものだった。洋楽を好んで聴いてはいたが英語が苦手だったこともあり、曲ばかりで歌詞のことなど考えてもいなかったからだ。

「さあ、わからないな」

「私にもよくわからないんだけど」

「何だ、それじゃ同じじゃないか」

「聴いていると思いつくの。アーハのボーカル、何となく私の弟に似てるの」

「へえ、弟がいたんだ」

「もう死んじゃったけど」

運ばれてきたコーヒーに、でも僕は口をつけることができなかつた。一ヶ月前に未央から放たれたその重い言葉が、時空を越えて再び目の前に提示されていた。

「死んだって、どうして？」

「学校でいじめに遭ったの。中学二年生だったんだけど」

千雪は淡々と話していた。その内容も一ヶ月前と同じだった。僕らは何も言えなかった。ポール・ヤングの「エブリタイム・ユ―・ゴー・アウェイ」だけが、店内に響く音の全てだった。

「私、尚くと死んだ弟を重ねて見ているのかもしれない」

「俺とも似ていたの？」

「どうかかな？ 雰囲気や仕草なんかは似ているかも。今思えば、だから尚くんには心を許せたのかもしれない」

一人っ子の僕にとって兄弟の存在がどういうものか、そして弟として見られている現実が何を意味するのかはよくわからなかった。男として見られていないことは明らかだったが、その先にある千雪の微妙な想いは不透明だった。でも僕はそれでよかった。今の気持ちに居心地のいいものならば、それ以上何の問題もないはずだった。

からだ。

「おい、何ぼおつとしてるんだよ」

最近考え込んでばかりいる僕に、武史はいつも同じ言葉を放って笑った。十一月に入っただばかりのその祝日は、過去の晴天率がナンバーワンであるにもかかわらず、その期待を見事に裏切った雨模様だった。昼間のうちはそれなりだった客足も夜にはめっきりと遠のき、僕らは来週にもチャートのナンバーワンになるに違いないスタ―シップの「ウィ・ビルト・デイス・シテイ」をかけながらあてのないひと時を過ごしていた。

「この頃の尚希、ちょっと変だぞ。何かあったのか？」

「人が人を好きになるって、どうということなんだろう？」

「えっ？」

「だから、男が女を好きになるって、どういう意味なんだろう？」

僕の哲学的な質問が余程意外だったらしく、武史は目を大きく見開いたままこちらを見ていたが、やがて得心したらしくいつもの人懐こい表情に戻って答えた。

「そんなの簡単だぜ。その子を見て、ああ、あの子いいな、付き合いいたいな、やりたいなって、そういう気持ち起きた時が好きになっただっていうことだろ」

「そうじゃなくてさ、もっとこう理性的に説明できないかな？」

「理性も何もどうでもいいことだろ。お前は少し考えすぎるんだ。

理屈じゃないんだよ。もっとこう直感的なもの……ピピツとくるインスピレーションだよ」

「まあ、そうかもしれないけど」

「尚希は千雪ちゃんに対して感じないのか？」

「そういう武史はどうなんだよ？」

「俺は……もちろん感じたさ。だから未央と付き合ってるんだ」

武史は頭の中で未央とのことを確認しているようだったが、少なくとも僕は千雪に対して感じたことはなかった。僕が感じたのはむ

しろ、同じ考え方を持つ同胞意識に近いものだった。

「たまたま女だったに過ぎないのかもな」

「えっ？」

「千雪のことだよ。一緒にいると落ち着くし、何でも話せてわかり合えるけど、やっぱり友達に過ぎないんだろうな」

武史は僕の語った内容を真剣に考えているようだった。でも、根本的な部分で二人の見解に差があるのは明らかで、最終的に武史は理解を放棄した。もっとも最初から、僕もわかってほしいとは思っていないかった。

「まあ、そんなに深く考えるな。そうだ、今度四人でどこかに遊びに行くか？ もちろん、基本的に別行動っていうことでさ。二人で一日を過ごしてみれば、いろいろとわかってくることもあるんじゃないか？」

武史の誘いは望むところだった。僕もある一日を千雪と二人で共有してみたかった。いつもの会話以外の何気ない仕草や行動を見てみたかった。僕がまだ知らない彼女を感じたかった。そうすることで、自ら迷い込んだ混迷の森を抜け出せるような気がしたからだ。

でも結局のところ、僕ら四人が遊びに行くことはなかった。僕と千雪のほうは全く大丈夫だったのだが、武史と未央のほうにかなりの問題があるようだった。武史からその話が出たのはそれきりで、シフトの関係から三人でバイトをすることはなかったものの、一緒に仕事をした時のそれぞれの陰鬱な表情や態度から、二人の間に何かあったことは容易に想像がついた。僕は、自分の気持ちのためにも状況を把握したかったが、直接訊くことがどうにも躊躇われた。ただ一度、抽象的ではあったが未央の口から語られたあの時以外には。

十二月も半ばを過ぎたその日は、町に初めての雪が舞い降りた記念日となった。昼間降り続いていた細かい雨は、夕方には白い妖精へとその姿を変えていった。夜の八時を過ぎると通りを行き交う人もめっきりと減り、僕と未央は奇妙な静寂が覆う店内で、チャート一位になったライオネル・リッチーの「セイ・ユー・セイ・ミー」を聴いていた。

「何か妙に神秘的な夜ね」

珍しくポニーテールをほどいていた未央は、遠い目をしながら窓の外に映る白い影を見ていた。彼女の横顔にも神秘的な影が映っているような気がした。

「雪のせいかな？」

「でも、今日みたいな雨の後の雪はすぐに消えちゃうのよね。人の想いもそうなのかな？ 人が人を好きになる気持ちもだんだんと消えていっちゃうものなのかな？」

「武史とうまくいつてないのか？」

僕の問いに未央は、口で答える代わりにゆっくりと首を左右に振った。でもその振り方に勢いはなく、肩を越えて伸びた彼女の髪がカウンターの上に落ちかかった。

「ただ何となくそう思っただけ。大体、自分の気持ちが掴めないのに、他人の気持ちなんかわかるわけがないのよね」

今度は僕のほうが答えられなかった。それほど未央の言葉は真実に裏打ちされた重みに満ちていた。自分の本当の気持ちが見えていない点では、僕も未央と同じ状況だった。それは同時に、未央や千雪の気持ちがわかっていないことを意味していた。だから僕らは、それぞれに確かめることが必要だった。降り続ける雪の白さを鏡にしながら、目をそらさずに自分の想いと向かい合わなければならなかった。

一学期最終日のその日は三時間程度で学校も終わり、昇降口で靴を履き替えた僕は、明日からの冬休みの過ごし方を漠然と考えながら、結局はバイト三昧になる結論に行き着いて何とも複雑な気分になっていた。もう少し変化のある楽しいことでもないものかと、校门へ向かって歩くグラウンドから見上げた空は雲に覆われていたが、雨や雪が降るほどの暗さはなかった。もっとも真冬の寒さは相変わらずで、僕は制服の上から羽織っていた紺のピーコートのポケットに手を入れながら、背中を丸めて肌を刺す北風を懸命にやり過ごそうとしていた。

視線を正面に移すと、その姿が妙にはつきりと僕の視野に入ってきた。いつもと同じタータンチェックのスカートに白のピーコートをまとったその子は、どこをどう見ても千雪に他ならなかった。

「何でこんな所に」

「ちよつと、一緒に来てほしいところがあつて」

「えっ、これから？ 一体どこへ？」

その質問に答える代わりに、千雪は僕を誘うようにゆっくりと歩き出した。彼女の背中はいつもより小さく見えたが、それが寒さによるものなのかどうかはわからなかった。ただ僕は、彼女に導かれるままに未知の目的地に向かって後をついていくしかなかった。

それは学校近くの駅から電車を二本乗り継いで、さらにバスで十分ほど揺られた場所にあつた。鄙びた寺の門をくぐって境内を右のほうに折れていくと、その先には三十ほどの墓石の群れが佇んでいて、あたりには澄んだ空気を切り裂くような鳥の鳴き声だけが響き渡っていた。千雪は一番奥の、比較的新しい塔婆だけが立つ区画でようやく足を止め、近くで買って胸に抱えていた花を手向けた後で手を合わせた。惹かれるように隣で手を合わせた僕は、そつと目を開けてなおも祈り続ける千雪の横顔を眺めた。

「今日が命日なの」

「弟の？」

「うっん、父親の」

「えっ」

「弟なんていないの」

千雪の告白を、でも僕はどう受けとめていいかわからずに立ちすくんでいた。弟のこと以外に彼女の家族のことを何も知らなかったが、その唯一の存在が否定された以上、父親のことも含めて僕が彼女に尋ねる根拠がなかった。いやそもそも、何故彼女が僕に嘘をついたのかわからなかった。

「私の家に来ない？ どうせ私一人だから」

千雪の誘いが、僕を再び現実へと引き戻した。僕にできることはただ首を縦に振ることだけだった。頭の中をきちんと整理する必要があった。虚像としての弟、父親の死、そして一人暮らし……。大波のように次々と提起された事實は、僕を完璧な混迷へと導いていた。そう、今さらながら僕は彼女のことを全く知らなかったのだ。何も知らずに自分勝手なイメージを作り出していたに過ぎなかったのだ。

千雪の家は寺からバスで十分ほど揺られ、さらに電車を二本乗り継いだ、つまりは僕の家とバイト先の最寄り駅を反対側に出て、駅前通りを十五分ほど歩いた二階建てアパートの一室だった。僕は、促されるままにその無機質なアイボリーの建造物に取り付けられた錆びた鉄の階段を上ると、彼女が目の前のドアノブに鍵を差し込む様子を不思議な気分で眺めた。ここにも、僕のイメージが間違っていることを示す動かしがたい証拠があった。

「何もないところだけだ」

ドアが閉まらないように千雪が脇に立ったことで目に入った空間は、まさに彼女が言ったとおり何もなく、程なく灯された明かりがさらに部屋の虚無感を強調した。

「何してるの？ 早く入って」

長い間入口に立っていた僕に痺れを切らしたのか、一足先に部屋に入っていた千雪は、少し苛立ったような早い口調とともに中に入るように手招きした。

「本当に……綺麗に暮らしてるな」

「お世辞なんか言わないでよ。何もないって、正直に言えばいいのに」

お世辞を言ったつもりは毛頭なかったが、それほどワンルームは綺麗に、実に何もなかったのだ。ベッドもテレビもラジカセも、机すらなかった。唯一あるとすれば、それは窓にかけられた薄いブルーのカーテンくらいだった。

「部屋で音楽とか聴かないのか？」

「聴かなかつたら、尚くんの店なんか行かないわよ」

どこかから出てきた電気ストーブのスイッチを入れながら僕の質問に答えた千雪が、白い壁に設えられていたクローゼットのドアを開けると、そこには少しくすんだ、でも貫禄のある大きなコンポ



が顔を覗かせた。よく見ると、その脇には服が入っているであろう収納ボックスや、綺麗に折りたたまれた一組の布団などが静かに佇んでいた。

「昔父親が買ったものなの。何か音楽でも聴く？」

ようやく目にした生活感のある光景に安堵した僕は、でも千雪の提案に対して首を横に振った。今日この場所に来た目的は、二人で肩を並べてのどかに音楽を聴くことではなく、真実の千雪を知ることにあつたからだ。

「じゃあ、コーヒーでも入れようか？」

自分のコートをハンガーにかけた千雪は訊きながら、同時にこちらに向かって手を差し伸べてきた。無言のまま着ていたコートを手渡すと、彼女は少しぎこちない手つきで別のハンガーにそれをかけた。二つ並んだピーコートは絶妙のコントラストで仲良く部屋の片隅に吊るされた。

「私のこと、いろいろと知りたいと思ってるでしょ？」

二人分のコーヒーを入れたカップを手にながら、千雪は僕の心の奥を見事に突いてきた。核心に触れた僕は返す言葉もなく、褐色に染まった液体の表面を眺めるしかなかった。

「でも急がないで。最初からゆっくりと話すから」

千雪に見つめられた僕は、身動きどころか心臓の鼓動さえ止まってしまうそうだった。このまま彼女の全てを知ってもいいものだろうか、今になって臆病風に吹かれ始めていた。彼女の人生を背負い込んでしまうかもしれない不安感が体全体を包み込んだ。でも僕は、やはり訊かなければならなかった。真実の彼女を受けとめなければならなかった。もう卑怯な後戻りはできなかった。

「弟がいるなんて、どうしてそんな嘘をついたんだ？」

「私の母親、私を産むと同時に死んでしまったの。もともと体が弱くて、それでお産に耐えられなかったみたいで」

僕の質問に対する答えとは明らかに違っていたが、千雪は自分を納得させるようにゆっくりと話し出した。だから僕も、あえて何も

言わずに彼女からの話の続きを待った。

「だから私、父親と二人きりで育ったの。母親がいなくても別に寂しくなかった。だって最初から傍にいなかったんだから、その存在がどんなものなのかわかるわけないわよ。ただ、他の子と比べると形式的な意味で違和感があったけどね」

母親の存在がない現実を、幸運にも僕は理解することができなかった。でも、同時に千雪の気持ちを掴めない意味で、僕はささやかな悔しさを胸に抱くことになった。

「父親は優しくかったけど、毎晩家に帰ってくるのが遅かったし、休みの日は競馬場通いだっただから、ゆっくり話したり遊びに行ったりする機会はほとんどなかったわ。思い出せるのは、小学一年生の時に行った近くの動物園くらいね」

自分の父親と重ね合わせていた。仕事を口実に毎晩のように飲んで帰ってくる。休みの日には朝からそそくさとパチンコに出かけてしまう。でも帰りには必ず家族へケーキを買ってくる父親の姿が、僕の脳裏を鮮やかに掠めていた。

「中学三年生の冬だった。珍しく、父親が早く帰ってきたと思ったら、私の前に大きなケーキを差し出して、急にクリスマスやるぞって楽しそうに叫ぶの。確かにその日はクリスマススイブだったけど、あんまり突然だったからびっくりしたわ。でも中を開けてみると口ウソクが入っていなくて、私はどうでもよかつただけけど、せっかくだから買いに行ってくるって、そのまま慌しく出て行っただの」

千雪の表情の変化を僕は見逃さなかった。それは話の流れが急展開することを予見させたが、鈍感な僕には具体的なイメージが湧いてこなかった。

「それきりだった」

「えっ」

「死んじゃったのよ。この世の中から消えちゃったの。ねえ、信じられる？ 何年かぶりに早く帰ってきて、無愛想な娘を喜ばそうとケーキまで用意して、たまたま口ウソクがなかったからってわざわざ

ざ買いに出かけたら、青信号の横断歩道を渡つたのに車にはねられたのよ。そんなのってあり？ 何かが根本的に間違ってるって思わない？」

語気を荒げながらこちらに向かって必死に訴えかける千雪に対して、僕はとつさに彼女の真横に場所を移すと、言葉の代わりにそつと肩を抱き寄せた。彼女の持っていたカップがこぼれ落ち、既に温かみを失っていたコーヒーがフローリングの床を褐色に染めた。

「ごめんなさい。つい……」

「根本的に間違ってるよ、絶対に」

それ以外に何と言えいいのかわからなかった。千雪が遭遇した不条理に対して僕が何を言ったところで無意味だった。世の中にある様々な理不尽の存在を頭ではわかっていたが、今までそのことを身近に感じたことはなかった。僕は、自分がいかに不自由のない呑気な人生を過ごしてきたかをつくづく思い知った。

「それが全ての終わりで始まりだった。高校には入ったけど、一ヶ月もたなかった。周りの人たちの存在が急に薄くなっていた。何が正しくて何が間違っているのか、何を信じていけばいいのかわからなくなった」

そこまでを言うと、千雪は肩から僕の腕をゆっくりと外して立ち上がり、台所の隅から雑巾を出してきて床を拭き始めた。自分の過去を拭い去るかのような手の動きに、僕の胸はやるせなく痛んだ。

「そんな私を救ってくれたのが音楽だった。一日中部屋で、FMから流れる曲を聴いていた。洋楽が中心だったから、歌詞の意味はよくわからなかったけど、体の中を通り抜けていくいろいろなメロディーが心の扉を少しずつ開放してくれた。このままじゃいけない、このままじゃいけないって……。気がついたら勉強を始めてた。取りあえずは高校に行こうって。他にやりたいこともなかったから」

床を拭き終わった千雪は雑巾を元の場所に戻すと、再び僕の目の前に小さく正座した。コーヒーをこぼした部分は既に明るさを取り戻していたが、彼女はまだ暗い過去の世界に身を置いていた。ただ何気なく聴いていた僕に比べて、彼女の音楽に対する想いの深さと重さに打ちのめされた。

「一年間勉強して、それで何とか今の高校に入ったの。回り道をしちゃったけど、友達もうまくできないけど、でも仕方ないよね。結果はどうあれ、それが私の人生なんだから」

「弟がいるなんて、どうしてそんな嘘をついたんだ？」

僕はもう一度同じ質問を試みた。今度は答えしてくれるであろう妙な確信があった。

「何でだろう、自分でもよくわからない。ただ、時々ふと思うことがあるの。弟がいたらどんなにいいだろうなって。私にはもう家族と呼べる人もいないし、せめて血の繋がった兄弟がいてくれたらな

って、頭の中で勝手に作り出していたのね。もっとも、空想とはいえ死なせちゃったのはよくなかったけど」

千雪はほのかに寂しげな笑顔を浮かべた後、つきものが取れたようにうなだれた。彼女は全てを話してくれた。でも僕には、それを聞くことの他にしてあげられることが何もなかった。自分の無力さだけが胸に重くのしかかってきていた。

「音楽でも聴こうか？」

それしか言葉が思い当たらなかった。でも、二人の共通項である音楽を聴けば、千雪の重荷を少しでも背負ってあげられるような気がしていた。

千雪は軽く頷くと、クローゼットのドアを開けてコンポの電源を入れた。程なくFMらしい軽いDJの音が聞こえ、無意味なコメントの後でバンド・エイドの「ドウ・ゼイ・ノウ・イツ・クリスマス」が流れ出した。その時になって、ようやく僕にも今日が存在する意味を認識できるようになっていた。

「俺、ケーキ買ってくるよ。ロウソクがたくさんついてるやつを。せつかくだから、クリスマスやるうよ」

「……ちゃんと帰ってきてね」

足早に外に出て行くこうとする僕の背後から、千雪の小さな声が響いてきた。突然胸に熱いものが込み上げてきて、僕は彼女に答えてあげられないままに後ろ手でドアを閉めた。

駅に着くと、周囲の華やかなイルミネーションと、楽しそうに屈託のない笑みを浮かべる二人連れや家族連れがやけに目についた。千雪の部屋とあまりに対照的な光景に、僕は世の中にある不条理や理不尽さに怒りすら覚えたが、ケーキを媒介にその一部でも運んでいけたらと、有名な専門店では持て余すほどの大きなクリスマスケーキを買った。

ロウソク存在を確認してから急いで千雪のもとへ戻ると、部屋の音楽はライオネル・リッチーの「セイ・ユー・セイ・ミー」に変わっていた。それ以外には物音ひとつなく、華やかではないものの

二人だけの聖夜に相応しい儼かな雰囲気が漂っていた。

「わあ、大きいね」

僕がケーキにロウソクを立てている間、千雪は目を大きく見開きながら小学生のように無邪気な声を上げた。

「ロウソクに火をつけるよ。電気を消して」

千雪は何度も頷くと部屋の隅にある電気のスイッチを切った。周囲には何もなくなり、僕は無防備な状況に少し怖さを覚えたが、程なく千雪が隣に腰を下ろしたことでその不安は解消された。

「さあ、千雪が火を消すんだ。これからの明るい人生を願って」

「そして、二人のこれからを願って」

千雪は思いきり息を吸い込むと、ケーキの上に円形に並べられた十本の明かりを次々に吹き消していった。

「二人のこれからって、どういう……」

千雪の唇が触れたことによって、僕の疑問は完全な言葉にならなかった。僕は初めからそうであったかのように唇を求め合い、口内の隅々にまで舌を這わせ合った。暗闇の中で、お互いの体を見失わないように強く抱き合った。波打つように高鳴る千雪の胸の鼓動が自分の鼓動と共鳴するのを感じながら、やがて僕は時間の感覚を失った。目の前にあるはずのケーキの姿さえ僕には映っていなかった。

何かに見つめられているような気がして目を開けた。丸みを帯びた千雪の肩越しには、窓越しの弓張月が孤独な姿を見せていた。聖夜の静寂と闇が部屋中を包み込んでいた。彼女の規則的な息遣いだけが僕の胸に響いていた。

「ケーキ食べようか？」

眠っていないことを確認するために放った僕の言葉に千雪はわずかに頷くと、二人だけの小宇宙から解き放たれたように立ち上がって台所に向かった。

「つけないで」

明かりをつけようと部屋の壁にあるスイッチに手をかけた瞬間、ささやくような、でも強い口調で放たれた千雪の声が耳に入ってきた。

「このままでいたい。明かりをつけたら、その瞬間にこの世界が壊れてしまうような気がするの」

切実に訴えかける千雪に、僕は返す言葉を失っていた。彼女にとって今のこの瞬間は儚く、でもかけがえのない一瞬なのだ。一瞬の延長に永遠があるのなら、たとえ何も見えなかったとしても僕は、彼女とともに暗闇の中から永遠を探し出したかった。

とはいえ、全くの手探り状態ではまともにケーキが切れるはずもなく、僕はその中央に余っていた一本のろうソクを立てると、二人の間に希望の光を見出すようにそっと火をつけた。

「このろうソクの火がいつまでもあるといいのね」

もちろん僕にも、何より千雪本人もそれがやがて儚く消えてしまふ運命にあることはわかっているはずだった。二人を繋ぐ糸が明日をも知れない状況であるように、人の一生に絶望的な終わりがあるように。でもだからこそ、僕らは懸命に生き続けるのだ。限りある命を精一杯燃やし続けるのだ。一瞬を大切に生きることが永遠を可

能にし、千雪との絆をより強固なものにしていくのだ。

「でも、いつか消えてしまふからいいんだよ。限りがあるからこそ強く光り輝くんだ」

「そうね、そうかもね。哀しいけど」

千雪が呟いた言葉の意味を、僕はそれほど深く考えてはいなかった。彼女の心の底辺にあるものを受けとめようとしていなかった。

そう、僕は訊くべきだったのだ。彼女の哀しみの真意を、その脆くて危うい心の有り様を残さずに。

程なく僕は、どちらからともなくケーキを食べ始めた。それは二人の関係を確認するための儀式のようにも思えたが、一方で千雪が本当に望んでいるものが何なのか、彼女が僕に何を求めているのかについて思いを巡らせていた。自分が彼女に対してしてあげられることの全てを見出そうとした。でも、その試みは虚しく宙を彷徨うだけだった。結局のところ、僕は彼女の中に深く入り込んでいなかったのだ。底なし沼に入り込むことを恐れていたのだ。臆病な僕はただ、目の前にあるロウソクの火がいつまでも消えないことを祈るしかなかった。

翌日の空はすっきりとした青だった。昼からシフトに入っていた僕は、昨日のバイトをさぼったことを武史にまず謝ろうと覚悟を決めて店に入ったが、意外にもそこにいたのは武史ではなく店長だった。武史は四時間遅れるらしく、店長はぶつぶつと文句を言っていたが、不思議なことに僕が怒られることはなかった。

「親の具合が悪くなったから休むみたいですから、言っておいたんだ。まあ、困った時はお互いさまだからな」

窓の外は既に夕暮れの気配だった。武史は片目を閉じて悪戯っぽい笑みを浮かべると、恩着せがましく缶コーヒーをおごることを僕に約束させ、今日はクリスマスだからと、ビルボードチャートを全く無視してワムの「ラスト・クリスマス」をターンテーブルの上のせて針を落とした。



「で、どうだったんだ？」

「どうって、何がだよ？」

「決まってるだろ。千雪ちゃんとのクリスマススイブ、すっかり楽しんだのか？ そのためにわざわざ店長に嘘ついて誤魔化してやったんだからな」

僕は、夕べの出来事を要領よく説明できる言葉を持ち合わせていなかった。おそらく武史は、僕に簡潔でわかりやすい答えを求めていた。うまくいったのか、あるいは駄目だったのか。でもそのどちらでもないように思えた僕には、武史の期待に沿うような一言を口から出すことができなかった。

「まあ、いろいろと難しいからな」

「ってことは、駄目だったのか」

「いや、そうでもない」

「じゃあ、一体何なんだよ？ 全くイライラするな」

「何だよ。そう言う武史はどうだったんだよ。昨日の夜は未央と一緒にだったんだろ？ 今日だって四時間も遅れてきて、全く幸せでいいよな」

「そう見えるか？」

「えっ」

「お前には、俺が本当に幸せそうに見えるか？」

僕に問い正した時と比べて、武史のトーンは明らかに下がっていた。一週間前に僕の前で寂しそうな姿を見せた未央が鮮明に蘇ってきた。二人がうまくいっていないことは疑いようがなかったが、かといって武史の口から直接聞き出すことを僕は躊躇った。心のバランスを崩した未央の存在によって、自分の気持ち混乱することが何よりも怖かったからだ。

「やめよう、この話は。尚希の言うとおり、いろいろと難しいからな」

でも、話は核心に触れられる前に強引に切り上げられ、武史はカウンターから離れて陳列棚に並んだレコードの整理を始めた。僕に

とつての一九八五年は、そうして自分自身や周囲に混迷の種を抱えながら終わろうとしていた。その先に何があるのかはわからなかった。ただ、たとえ行き着く先に無限の荒野が広がっていたとしても歩き続けなければならぬ過酷な現実だけがそこにあるような気がしていた。

「今日は日差しが強そうだな」

大きく伸びをしながら武史が気だるそうに目をやるその向こうには、午後二時を過ぎた五月半ばの日曜日の雑踏が広がっていた。眩い日の光を浴びて、皆一様に生き活きとした笑顔を浮かべながら窓越しに僕らの前を行き交っていたが、それとは対照的に店内はほかに薄暗く閑散とした雰囲気にもまれていた。客足は相変わらず鈍く、僕は三位をピークにビルボードチャートを下降中ではあったが今の自分の気持ちにぴったりの、バングルス「マニック・マンデー」をここぞとばかりにかけた。

「『マニック・マンデー』ならぬ、『マニック・サンデー』だな」  
少し前に髪を黒く戻していた武史の眩きが、僕を切なくも物憂げな記憶の渦の中に陥らせた。この冬から春にかけては、本当にいろいろなことがあった。無限の荒野に行き着くかと思われた僕と周囲の状況は、少なくとも表面的には以前と変わらなかった。日常という圧倒的に退屈な流れの中で僕は高校二年生となり、武史とのバイト生活も同じように続いていた。でもそこに、少し前まで無邪気な笑顔で僕らの横に佇んでいた未央の姿はなかった。風前の灯に見えるた武史と未央との仲は年明けに程なく解消され、明らかに居心地の悪くなったと思われる未央は一月一杯でバイトのシフトから名前を消していった。

「他に好きな男ができたらしい」

意外にさっぱりとした口調の武史に、その真偽はともかく、僕は男としての潔さよりもいじらしさを感じていた。と同時に、儚く移ろう男と女の間接関係を、この時ほど現実的に重く受けとめたことはなかった。もつとも、それを理解しきるほど大人ではなかった僕は、何より自分自身に降りかかった予測不可能の事態に深く動揺していた。不安定さを抱えながらもお互いにわかり合えたと信じていた千

雪との関係は、クリスマスイブの夜を最後にぷつりと途絶えてしまった。彼女は僕の前から忽然と姿を消し、年が明けても店に姿を現すことはなかった。一ヶ月が過ぎてついに居たたまれなくなった僕は、彼女のアパートに行き何度も部屋のブザーを押したが、目の前の扉が開かれることは決してなかった。僕はそれを何度か試みた末に、理由はどうあれ千雪はどこか遠い場所に行ってしまったことを確信したが、その原因が何なのかはわからなかった。あの夜に取り返しのつかないことをしてしまったのではないかと、記憶の糸を手繰り寄せるように懸命に思い返してみたが、抱き合って唇を重ねたとはいえ、そこから先に進むことのなかった自分に非があるとはどうしても思えなかった。あるいはそれこそが、僕が犯した決定的な過ちだったのかもしれないが、いずれにしてもこの冬ほど心も体も寒い季節はなかった。

「おいっ、何ぼおつとしてるんだよ？ 久しぶりに彼女が来たじゃないか」

武史の声はどこか宙に浮いているように響いていて、僕の目の前に広がる世界が現実味を帯びるまでにしばらく時間がかかった。でも、彼女……千雪は確かにそこにいて、カウンターの前で五ヶ月ぶりの笑みを浮かべていたのだ。

「今までどこで何してたんだ？」

「ねえ、明日空いてる？」

僕の問いかけを全く無視した千雪は、これまでにない表情の豊かさで逆に尋ねてきた。しばらく見えない間に肩までの髪はほのかに茶色く染められ、軽いウェーブがかかけられていた。限りなく素に近かった顔には薄く化粧が施され、目が痛くなるほどに白いカッターシヤツとかすかにチエックの入った水色のスカートが彼女に生じた明らかかな変化を象徴していた。

「明日は学校だよ」

「どうしても付き合っしてほしいところがあるの」

「一体どこなんだ？」

「それは行つてのお楽しみよ。じゃあ、詳しいことは後で電話するから」

言いたいことだけを全て言ってしまうと、僕の様々な疑問を置き去りにしたまま千雪は足早に店を出て行った。その後に残されたのは、彼女が身にまとつていたかすかなコロンの香りだけだった。

「彼女、しばらく見ない間に変わったな」

「ああ」

「でもよかつたな。お前と千雪ちゃん、もう駄目かと思つていたけど、今日の感じならまたやり直せるんじゃないか？」

僕以上に武史のほづが素直に喜んでるように思えた。いや正確に言うと、僕は喜ぶ前の段階でまだ立ち止まっていた。千雪の出現があまりに唐突だったこともあり、二人の間に横たわる距離感をうまく見定められていなかったのだ。だからともかく、僕は千雪と話をする必要があつた。今までのこと、そしてこれからのことを含めて彼女と語り尽くさなければならなかつた。

翌日、僕と千雪は駅前で午前九時に待ち合わせると、普段は乗らない南向きの電車のシートに並んで座った。親の手前学校に行くふりをして制服姿で出てきたが、結局のところ学校をさぼった事實は拭いようがなく、僕は平日の午前中に電車の中にいる不自然さを感じながらも、隣に座る千雪の姿に目を奪われていた。この五ヶ月の間に彼女が変貌を遂げたことは誰の目にも明らかだった。昨日は久しぶりだったこともあつて外見ばかりが目についたが、今日改めて話してみると内面の変化も相当なものだった。一言で言うなら、心の扉が外に向かつて大きく開放された印象だったが、その原因が何なのかは依然謎のままだった。肝心なことになると千雪は口を閉ざし、それはまた後でと先延ばしにするだけだった。僕はかすかな苛立ちを感じながらも、ともかくそんな夏の日差しのように眩しく輝く千雪に会えた喜びに胸が高鳴っていた。

千雪が僕を誘ったのは、未だ人気のまばらな海だった。鄙びた駅を降りてものの数分もしないうちにその広大な姿が目飛び込んできた。うつすらとした雲に覆われていたものの時折顔を覗かせる太陽は強く輝き、沖で戯れるサーファーたちとともに僕らをも照らし続けていた。紫外線が強いせいか肌がちくちくと痛んだが、程なくそれも吹き抜ける潮風の優しさに掻き消されていった。

「ここに来たの、久しぶり」

「前にも来たことあるのか？」

「ずっと昔、私のおばあちゃんの家があつたの」

千雪は遠く水平線を見るように目を細めた。その間に懐かしく過去を遡っていたのかもしれない。彼女の髪がかすかになびき、そこからほのかなライムの香りがした。

「詳しく話してくれないか？」

その言葉が千雪に届いているのかどうかわからなかったが、いず

れにしても僕は、この五ヶ月の間に彼女に起こった出来事を、何より彼女の真の想いを訊かなければならなかった。そうしないことは、物事は何も前には進まないのだから。

「その前に音楽聴かない？」

それは唐突な千雪の提案だった。僕は自分の問いかけが逸らかされたことも忘れて、彼女が薄いベージュのバッグから銀色のウォークマンを出す姿をぼんやりと眺めていた。

「さあ、尚くんはこっちよ」

千雪は無邪気に微笑みながら、こちらに向かってヘッドフォンの片方を差し出した。無造作に受け取って耳にあてると、程なくそこから聞き覚えのあるメロディーが静かに流れ出した。

「これは渡辺美里」

「そう、『ティーンエイジ・ウォーク』よ。私、この曲が大好きなの。特にほら、ここのフレーズが」

波の音に掻き消されてよく聞き取れなかったが、もちろん僕はこの新曲をよく知っていた。歌えと言われたらフルコーラス歌えるほどに好きだった。

「本当にこの歌のとおりよね。自分も愛せずに、本気で誰かを愛することなんてできないのよ」

それが千雪の話の始まりだった。僕はヘッドフォンを外して彼女の口から発せられる次の言葉をじっと待った。

「私は今まで、本気で人を好きになつたことがなかった。思えば父親さえも好きになれなかったのかもしれない。でも当然よね。誰かを好きになる前に、何より自分自身が嫌いだったんだから」

千雪は再び彼方に広がる水平線を眺めた。サーファーたちが波にのまれるたびに上がる水しぶきが太陽の光に反射してきらきらと輝いていた。

「私自信がなかったの。尚くんに対する気持ちに確信が持てなかったの。私の想いが、クリスマススイブに感じたあの心の震えが何だったのか、あなたのことが本当に好きなのか、自分でもうまく掴めなかった」

千雪の放つ言葉には誠意があった。できるだけ正直に話そうとする真摯な姿勢が僕の胸にダイレクトに響いてきた。

「だからアメリカに行ったの」

「えっ」

でもその単語だけは異様だった。千雪がどこか遠い場所に行ったことには感づいていたが、まさかそれが異国の地であったことはさすがに僕の思いの外だった。

「箱庭みたいに小さな自分の世界を離れて、全く新しい未知の場所に行けば、少しは自分のことが好きになれるかもしれないって」

自分を試すために新天地に赴いた千雪の想いが痛いほどに理解できた。だから言うてほしかった。アメリカ行きのことではなく、窮屈な箱庭でもがいていた彼女の苦しみや辛さを僕に伝えてほしかったのだ。

「三ヶ月はあっという間だった。向こうで様々な人と出会って、たくさん遊んで。もちろん嫌な思いもしたけど、でもいろいろなることを経験したことで何かが変わったの。吹っ切れたというか重荷が取れたというか、とにかく私を縛っていた見えない鎖から解放されたの。鳥が大空に羽ばたくみたいに」

「千雪がいなくなって、俺ずいぶん悩んだんだ。自分のどこがいけなかったのかも真剣に考えた。だから言うてほしかったんだ。力になりたかったんだ」

「黙って勝手なことをしてごめんなさい。でも私わかったから。まだ完全に自分が好きになりきれないけど、少なくともこのことだ



けはわかったの。私はあなたを必要としてるって。どうしようもなく宿命的に」

千雪は、いつになく真剣な表情でこちらを見つめてきた。その瞳の奥にある意志の強さが、僕に自分の気持ちを伝えさせる原動力となった。

「本気で誰かを愛することから、自分のことを好きになってもいいんじゃないかな」

「えっ」

「俺も自分のことが大嫌いだった。臆病で弱い自分にうんざりしてた。でも、千雪と出会えたことで変わったんだ。諦めずに未央に自分の気持ちを伝えられたし、うまくいかなかったけど、こんな自分って結構いいなって思ったんだ。本気で人を好きになったから、千雪を好きになったから今の俺があるんだ」

千雪の瞳を通して心に訴えかけていた。そう、僕はどうしようもなく彼女のことが好きだったのだ。宿命的に、根源的にその存在を求めていたのだ。

「先のこととはわからないけど、今この一瞬の積み重ねが永遠なら、俺は千雪と一緒にずっと歩いていきたい。たとえその先に無限の荒野が広がっていても決して後悔しない。いや後悔したつていい。とにかく好きなんだ。どうしようもなく、お前のが好きなんだ」

そこからの時間の流れは抗いようのないものだった。僕らは惹き寄せられるようにお互いの唇を求め合い、気が遠くなるほどに強く抱き合った。彼女の口からはほのかにレモンの香りがした。もっともそれが、少し前に食べたキャンディーのせいかなどどうでもよかった。僕はただ、そんな甘酸っぱい二人だけの世界に浸りたかったのだ。いつまでも、どこまでも二人で行けることを、そして二人がひとつになれることを信じて。

波の音が聞こえたような気がして目が覚めた。仰向けに横たわる僕の視線の先には薄汚れた天井が広がり、こちらを無機質に見つめていた。次第にはつきりとしてくる意識と感覚の中で、右頬に優しい温かさを感じて横を向くと、外界を阻害するかのようには立ち上がる分厚いピンクのカーテンの隙間から、一筋の光が差し込んでいた。僕がそれに誘われるように窓際に歩み寄って一気にカーテンを開けると、目の前には映画のスクリーンのように広がる早朝の穏やかな海があった。でも、その眩いばかりの煌きに映し出された自分の裸を認識した瞬間、僕は自分の記憶から失われたこの一日の出来事を否応なく思い出すことになった。

結果として見れば、千雪と抱き合って過ごした時間は二十分程度のものであった。でも僕には、それが半日にも一日にも感じられた。僕らは話をすることも忘れて、二人だけの世界の中で戯れた。ひとしきり波打ち際ではしゃいだ後、足の痛みも忘れて何時間も歩き続けた。降り注ぐ太陽の光が肌から汗を誘い出すのも気にならなかった。僕は今の充実した気持ちがい失われることが怖くて、ただやみくもに彷徨い続けていた。

気がつくと、周囲には夜の闇が忍び込んできていた。僕らはどちらからともなく歩みを止めると、暗闇が二人の存在を危うくするのを恐れて再び唇を求め合った。そこがどこだったのか、誰が見ているかなどは関係なかった。少なくとも僕は、千雪さえ傍にいてくれれば何もいらなかった。

結局のところ、僕は二人だけの居場所を求めていたのかもしれない。たえそれが、海沿いに立つうらぶれたラブホテルでもよかったのだ。二人で一緒にいられることが全てだった。仮に空恐ろしい神社の境内だったとしても関係がなかったのだ。

僕はホテルの部屋に入ると、赴くままに体を求め合うことに夢

中になった。お互いに不器用であるはずだったにもかかわらず、その行為は少なくとも二人を精神的に満足させるのに十分なものだった。テクニクなど必要なかった。最後に聞こえた千雪のかすかな声がそれを象徴していた。

千雪……僕は後ろを振り返ってあたりにその姿を追い求めた。でも、部屋に漂う絶望的な喪失感がある事実を端的に示していた。そう、彼女はいなくなってしまったのだ。ここから、いや僕の目の前から永遠に。そして僕の直感は、彼女の眠っていた場所に置かれていた四つ折の青い紙片を見つけるに及んで決定的なものとなった。ベッドのその部分には、まだほのかに彼女の香りが残っていた。僕は紙の青さにかすかな胸の痛みを感じながらも丁寧に開き、そこに並んだ文字の数々を少しずつ目で追い始めた。

尚くんへ

勝手に先立つことを許してください。なんて言うと、いかにもこれから死んでしまうような感じだけど、これが今の私の正直な気持ちです。そして、他ならぬ尚くんならわかってくれると思います。

私に対する尚くんの気持ち、とても嬉しかったです。と、こんな風に簡単に言ってしまうと薄っぺらいかもしれないけど、本当に心の底から嬉しかったです。私もあなたのことが大好きです。できればこれからもずっと二人で一緒にいたい……。久しぶりに会って、改めてそのことを実感しました。でもやっぱり、自分を好きになれないうちには、あなたとうまくやっていける自信がありません。あなたは言うてくれました。本気で誰かを愛することから、自分のことを好きになってもいいんじゃないかと。確かにそうかもしれないですね。あなたを本気で愛するうちに、気がついたら自分を愛していることもあるのかもしれない。でも私には無理なのです。何故ならそれが私だから。私は根源的にそういう不器用な人間なのです。だから再びアメリカに旅立ちます。ささやかな箱庭から抜け出して大空へ飛ばたくために、そして何より自分自身を好きになるために。

当分は日本に帰ってこないつもりです。何年かかるかわかりませんが、自分で納得のいく人間になれた時、改めてあなたの前に姿を現すでしょう。もっともあなたはもう、私のことを忘れてしまっているかもしれない。あなた自身の新しい世界を見つけ出しているかもしれない。だったらそれでもいいのです。私のことは思い出のアルバムの中にそっとしまっておいてください。

最後に、あなたに出会えたことを感謝しています。私の一生の宝物です。だから、いつまでもそのままのあなたでいてください。

では、いつか偶然が重なることがあったら会いましょう。

たくさんの幸せをありがとう。さようなら。

居たたまれなくなった僕は、服を着るのももどかしく急いで部屋を飛び出した。ホテルを後に海岸通りを横切り砂浜に降り立った。いるはずのない千雪の名を虚しく叫び続けた。確かに僕にはわかっていた。いつか彼女との日々に終わりが来ることを。二人だけの永遠の世界など決して存在しないことを。でも早すぎた。あまりにも唐突だった。僕らはまだ十代だった。まだこれからの発展途上だった。それなのに何故、彼女は完璧を求めるのか。不完全でも純粹な今を享受しようとしなのか。僕は悔しかった。目の前に広がる水平線の彼方に必死に答えを見出そうとした。もっともそこには、一艘のヨットが所在なさに漂う姿があるだけだった。そう、答えを見出すには僕は明らかに若すぎたのだ。僕がようやく理解できたのは、それから九年が過ぎた五月のある晴れた水曜日だった。

気がつくところ「ティーンエイジ・ウォーク」は終わっていて、カーラジオのFMからは再び害のない音楽が流れていた。五月の物憂げな青空を見ながら海岸通りを走るシビックは確実に目的地に近づいていたが、それとは反対に僕の心は戸惑いと不安に満たされていた。九年ぶりの千雪からの手紙は、一ヶ月ほど前に僕の住むアパートの部屋に無造作に放り込まれていた。その日は会社での残業が夜遅くまで続き、僕は辛うじて間に合った終電に駆け込むと、疲れた体を引きずるように部屋のドアを開けた。手紙など見られる状況ではなかったが、幸運にも足元に生じた違和感で拾い上げた薄いブルールの封筒の裏面に書かれていた名前が、僕にその日一日で最後の、でも最高の気力をもたらした。

手紙はひどくシンプルなものだった。今は日本にいる、会いたいから来月のあの日、ちょうど九年前に行った砂浜で待っている、それだけの短い文章だった。僕は久しぶりの千雪との出会いに胸が躍ったが、同時に今の自分の姿を見せることに躊躇いを感じていた。あれから長い時間が経過したが、僕は自分自身の新しい世界を見出すどころか、ささやかな箱庭から抜け出すことさえできずにいた。ひたすら自分の殻に閉じこもり、決して千雪以外の誰かを好きになろうとしなかった。かつて感じていた自分への愛情も次第に薄くなり、僕はすっかり大人の女性になったであろう彼女とどう向き合ったらいいのかわからずに途方に暮れた。でも、だからといって彼女に会わないわけにはいかなかった。何故ならそれこそが、僕がこの九年間ひたすらに待ち望んできたことなのだから。

平日の昼間とあって道が空いていたこともあり、約束の正午にはまだ間があった。僕は車を駐車場に入れると、近くにあった自動販売機でジュースを二本買ってから砂浜に降り立った。

目の前に広がる風景はあの時のままのように思えた。彼方に佇む

水平線も、打ち寄せる波の音も、そして頬を撫でる風の歌も、何もかもが九年前と同じだった。僕は懐かしさに目を細めながらも、必然的に自分自身が変わっていない現実と改めて向き合うことになったことですか。かな胸の痛みを覚えた。おそらくこの中で変わったのは、これから姿を見せる千雪だけだろう。それが僕をどうしようもなく切なく哀しい気持ちにさせた。

「失礼ですが、塚本尚希さんですか？」

右横から聞こえてきた声に振り向くと、そこには背が高くほっそりとした男性が立っていた。白いカッターシャツにストーンウォッシュのジーンズ姿は、おそらく二十代前半だろうという以外には全く情報を与えてくれなかった。

「そうですが、あなたは？」

「やっぱりそうでしたか。姉さんの言ってたとおりの人だ。俺、崎谷千雪の弟です。今日は姉さんの代理でやってきました」

唐突に現れた男の話はやはり唐突だった。千雪の弟を名乗るこの男は一体何者なのか？ 大体弟の存在は嘘ではなかったのか？ いやそもそも何故千雪はここに来ないのか？ 僕は次々と湧き出る疑問の渦に巻き込まれないように踏みとどまるだけで精一杯だった。

「弟？ 千雪は一人っ子のはずだけど」

「そうですね、姉さんに弟はいません。いや、この言い方がいけないですね。正確には弟分です」

男は僕よりも数センチ背が高かった。僕らは腰を落ち着けて話ができるように波打ち際から遠ざかると、海岸通りから砂浜に降りる石段に並んで座った。千雪に渡すはずだった缶ジュースを差し出すと、男は夏の青空のように清々しい笑顔を見せながら軽く頭を下げた。

「千雪さんには本当によくしてもらいました。音楽関係の仕事がしたくて、高校を卒業してすぐにアメリカに行ったものの、どうしてもいかなかったら途方に暮れていた僕を助けてくれたんです」

「音楽関係の仕事って？」

「はい、プロデューサーになりました。それで、とにかく向こうで勉強したい一心だったんですが具体的なあてもなくて。そんな時、あるレコード会社で働いていた千雪さんに遭ったんです」

「千雪がレコード会社で？」

「その方面では結構名の知れたプロデューサーでした。有名なアーティストの作品も数々手がけていたんです。だから、彼女のほうから一緒にやらないかって声をかけてもらった時は本当に嬉しかったです。彼女の下で仕事ができるなんて光栄でした」

男は缶ジュースのプルタブを開けてひと口飲んだ後、瞳を真正面に向けて水平線の彼方を見ていた。そこに千雪の影を追っていたのかどうかはわからなかったが、弟として姉をいたわる真摯な想いが少しずつ僕の胸に伝わってきた。

「尚希さんの話もよく聞きました。私にとってとても大切な人だっ  
て、遠い目をしながら懐かしそうに語る横顔が印象的で、それであ  
なたに興味を持ったんです」

「それで、千雪の代わりにわざわざ会いに来てくれたの？」

「それもあります。でも本当の目的はこれを渡すことにあります」

男はあらかじめ手に持っていた正方形のものを僕に差し出した。

それは、薄いブルーの包み紙に覆われていて中身はわからなかったが奇妙な存在感があった。

「これは？」

「姉さんから、千雪さんから託されました。CDです」

「どうして千雪自身が会いに来ないんだらう？」

「来られないからです」

「えっ？」

「先月末に交通事故に遭って入院中だからです」

その言葉はメデューサが唱えた呪文のように僕を石化させた。交通事故？ 入院中？ 何かを言わなければ、いや動かなければならないはずだったが、頭の中は逆に真っ白になり、ただ横に座る男を眺めるだけの時が流れた。

「千雪は、その病院はどこに？」

「行っても無駄でしょう。こう言うっては酷かもしれませんが、彼女には意識がありません。そして、おそらく永久に戻らないだろうと医者も言っていました」

「どうしてそんなことに？」

「それを作るためです。作っている途中である大切な曲の音源がないことに気づいて、彼女その曲を探しに行っただけです。それで、横断歩道を青信号で渡っていたところを車にはねられて……」

千雪の父親の話の思い出していた。娘のために、ただケーキに立てるロウソクを買ったためだけに外に出て事故に遭った彼女の父親と千雪が重なって見えた。彼女も僕のために、ただこのCDに足りない一曲を探すただけに理不尽な憂き目に遭ってしまったのだ。

「その曲って何だったの？」

「渡辺美里の『ティーンエイジ・ウォーク』でした。他の曲は全て洋楽だったんですが、その曲だけ邦楽だったんで用意し忘れていた



んです」

「でもそれじゃ、これは未完成なの？」

「いえ、彼女の意思を受け継いで僕が作り上げました。だからその意味ではCDは完成しています」

僕は手元にあつた正方形の物体の包み紙を外すと、透明なケースの向こうにある白くて丸いCDを眺めた。そこには千雪の文字で、

『For Naoki With Love』と書かれていた。

「じゃあ、俺はこれで」

その声に目を上げると、既に立ち上がっていた男がこちらを哀しげに見下ろしていた。同情されていることがわかった僕は、それを振り払うように訊くべくして訊かなかつた質問を口にした。

「そうだ、君の名前を訊いてなかつたよね」

「姉さんからは、尚くんって呼ばれてました。それ以上のことは、もういいですよね」

ここに至つて僕ははつきりと千雪の切なる想いを体感していた。彼女は自分を好きになれたのだ。そのうえで僕を正式に求めていたのだ。愛してくれたのだ。そう思うと、いやだからこそ訊きたかった。尚くんと呼ばれたこの男にはつきりと尋ねたかった。

「千雪は、そんな彼女は幸せだったのかな？」

「そうだったと思います。だってそのCDを作っていた時の彼女、小学生みたいに無邪気にはしゃいでたから」

こちらに軽く会釈をした後、次第に遠くなつていく男の後ろ姿を見ながら、僕は千雪との間に広がる世界を求め、確認するために急いで自分の車に戻った。そこに自分のために買った缶ジュースを置き去りにしたままで。

## エピソード

駐車場を出て程なく、カーステレオから千雪の作ったCDが流れ始めた。それは十年前の五月から、僕らが初めて出会った時からの一年間を示す時のアルバムだった。どの曲も、彼女との思い出と深く結びついていた。レンタルショップで初めて彼女を見つけた時に流れていた「ドント・ユー」、初めて声をかけた時の「サマー・オブ・シックスティナイン」、二人でビルボードチャートの一位を喜び合った「テイク・オン・ミー」、そしてクリスマススイブの夜に抱き合った時の「セイ・ユー・セイ・ミー」……。

気がつくとき泣いていた。視界はとめどなく溢れ出る涙に霞んで見えなくなり、まともに運転することもままならなかった。でも僕は休むことなく車を走らせ続けた。そうしているうちは、セピア色に輝く二人だけの世界に浸ることができたからだ。

でも、曲が最後の「ティーンエイジ・ウォーク」にさしかかった時によやく涙はなくなり、僕は次第に頬を緩ませて笑い始めていた。そう、僕は変わること求められているのだ。数々の試練を乗り越えて自分を愛せるようになった、そしてこれほどまでに僕を求めてくれた千雪に応えなければならなかった。自分を愛する努力をすることで、本気で千雪を愛さなければならなかった。だから僕は大空に羽ばたかなければならなかった。かつて千雪がそうしたように、自分だけの翼でささやかな箱庭から飛び立たなければいけないのだ。

もう泣くまいと決心していた。今度は僕が千雪に追いつく番だった。僕が僕であるために、そして何より一瞬の積み重ねの果てにある二人だけの永遠を手に入れるために。たとえそれが無限の荒野に通じていたとしても構わなかった。何故なら、その先には必ず緑のオアシスが僕らを温かく迎えてくれるはずだからだ。

ふと仰ぎ見た青空は僕を大らかに包み込み、そこに光り輝く太陽

が頬を伝う涙の跡をすっかり乾かしてくれていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2430c/>

---

Teenage Walk

2010年10月8日15時01分発行